

体腔液検査マスター

一般検査ベーシックマスター！

◎佐伯 仁志¹⁾

独立行政法人 国立病院機構 敦賀医療センター¹⁾

【はじめに】

連絡先 0770-25-1602（内線 340）

平成 29 年 3 月に発刊された一般検査技術教本には、一般的な測定項目や計算盤での算定方法、さらにはギムザ染色における標本作製手技および細胞分類の方法が掲載されているが、体腔液検査領域においては尿沈渣検査や髄液検査のような標準法が存在しないこと、体腔液検査法をテーマとして取りあげた研修会開催が少ないこと、細胞形態を示したアトラスなどの出版物が少ないことから、手技や細胞判定などが統一化されていないことが推測される。今回はこれらの現状を踏まえて、特に個人的要因が大きく検査結果に左右すると考えられるギムザ染色における細胞分類について述べる。

【ギムザ標本（塗抹標本）作製について】

“細胞分類を正しく行うためにはきれいな標本で行う”つまり、きれいな標本作製することが必要で、このための技術は必須である。実際の方法としては“引きガラス法”が一般的に多く用いられている。この方法のポイントは、塗抹に必要な有核細胞の回収方法と引きガラスの作成時の手技が挙げられる。実際の方法については当日述べる。

【細胞分類について】

ギムザ染色標本に出現する細胞は血球系の細胞、中皮細胞および組織球、異型細胞が挙げられるが、前述の通り細胞形態を示したアトラスなどの出版物が少ないことから検査室における細胞形態分類に苦労している施設も多いと思われる。特に中皮細胞、組織球、異型細胞の 3 つの細胞は現場でも鑑別に苦労していることは筆者自身が第 51 回近畿医学検査学会（2011 年、滋賀県開催）のシンポジウムにおいて発表している。当日はこれらの細胞の鑑別ポイントについて述べる。

【まとめ】

体腔液領域には標準法が存在しないこと、体腔液をテーマとした研修会の実施が非常に少ないことや細胞形態を示したアトラスがほとんど見られないといった現場で検査を実施する技師の情報量の少なさは裏腹に、医療現場において体腔液検査は少なからずとも検体は提出されている。このことから一日も早く標準法や細胞形態を普及できるようなアトラスが世の中にリリースされることを望む。